

『犠牲となるべく者』

バート・カスタルが質問を終えた後、それまで黙っていたナイト・ゲイルが口を開いた。「私からも、伯爵と皆様にお伺いしたいことがあります」

ナイトはこういう場での会話が得意ではない。バートが心配そうに見守る中、慎重に彼は言葉を紡ぐ。

「何故、ここに水の神殿と魔法具があるのでしょうか？ 火の魔力を抑えるのであれば、火の神殿と魔法具ではありませんか？」

「それはウォテュラ王国の王家が、水の継承者の一族だからです」

そう答えてサーナ・シフレアンはハッとする。

ウォテュラ王国にも、当然他属性の有能な魔術師は存在している。

魔力を増幅して火山活動を抑えるだけなら、水属性だけの増幅器でもなくてもいいはずだ。

彼の言う通り、火の属性で火の力を抑え、地の属性でマグマを岩石に変えて抑える方法だって、考えられたはず。

「そして、神殿と魔法具を複数作らなかった理由は为什么呢？ それだけ危険な火山なら、複数作って確実性を増した方が良かったのでは」

ナイトの指摘に、一同深く考え込む。

「複数で当たれない理由——魔法具の材料に『聖女』が関わっているのでしょうか」

「分かりません。私が火の魔力の吹き溜まりがこの付近にあるということを知ったのは、つい最近——レイザ君に聞いたばかりなのです」

アシルは苦笑しながら答えた。

「100年前、王国に連れ去られた聖女が戻って火山を沈めた、20年後に聖女の子供が自分の子供を犠牲にして暴走から守った。

その5年後に水の神殿が出来て調整は必要なくなった？ 出来過ぎだ」

ナイトは眉間に皺を寄せて、呟いた。

「子供を犠牲にした聖女の子供はその後どうしたん……のでしょうか？」

誰も答えられないと知りつつも、ナイトは疑問を口に出した。

「……それを知っているのは、この国では私の伯母。レイザ君の祖母だけでしたようですが、伯母は随分前に自害しました。その前に、レイザ君に遺書を残していたようです」

知る必要があるというのなら、彼に聞いてみると良いと、アシルは言った。

話すとは限らないが……とも続ける。

「そして、ウォテュラ王国が水の継承者の一族だというのなら、ルース姫も聖女に関係あるのですか？」

「姫は、水の魔力の継承者です。彼女はいずれ、水の魔力の吹き溜まりに行かねばならない。ですから、この地の火山の問題は、火の継承者の一族であるインダー家と、あなた方に委ねます」

アシルははっきりと言い切った。

この件に干渉するつもりはないとでも言うように。

ナイトとマーガレット・ヘイルシャムは思い出す。

レイザと初めて会った時に、彼は「犠牲を出さずに、皆が助かる方法などない」と強く言い切ったこと。

それでも「全員で生き残る」と言い、譲らなかったナイトに、クールな印象の彼が感情を露に「この先何があってもその信念曲げんなよ」とギラリと目を光らせながらも、自嘲気味な笑みを浮かべていたこと。まるで、そう、俺を助けられるものなら助けてみると、出来る筈がないとナイトを嘲りながらも、信念を曲げず——助けて、ほしいという彼の内から出る叫びも籠められてた気がした。

「この神殿には、何か秘密があるはずですよ」

「探しましょ、一刻も早く」

サーナ、ラトヴィッジ・オールウィンが立ち上がり、ナイト、バート、マーガレットもそれに続く。

アイザック、そしてアシルもゆっくりと立ち上がると「よろしくお願ひします」と、穏やかに微笑みかけた。

(全員で生き残る……俺がそうすると決めた、だからやる。その為に考えて動くんだ、俯いている暇はない)

ナイトは強く拳を握りしめる。信念に変わりはない。

こちらのリアクションは以下のPCに発行されています。

マーガレット・ヘイルシャム  
ラトヴィッジ・オールウィン  
ナイト・ゲイル